

「外科医と女性に優しい陽子線治療」

特定非営利活動法人 女性呼吸器疾患研究機構（NPO Women's Respiratory Disease Research Organization : WORED）理事長

財団法人 脳神経疾患研究所附属 呼吸器疾患研究所 所長

宮元 秀昭

私は昭和56年に秋田大学医学部を卒業し、卒業と同時に東京で外科医の修行をし、呼吸器外科専門医として長らく肺がんの外科治療に携わってきました。今年から、郡山市の総合南東北病院を中心とする南東北グループに所属し、民間として日本で初めて導入される**陽子線治療**をたいへん心待ちしています。また、本年5月に東京都の認証を得て「特定非営利活動法人 女性呼吸器疾患研究機構」を設立しました。この会を共催しています。

わが国の平均寿命は大幅な伸びを示していますが、疾患感受性や老化の程度における男女の違いなど性差の存在を示唆しています。このことは人々の健康、健康の維持を考えるときに男性と女性を区別して考える必要性を示しています。とくに**肺がん**では、日本では男性のがんによる死亡原因の第1位であるのに対して女性では2位ですが、女性肺がんは確実に増加していて、女性肺がんの増加が日本人全体の肺がん増加の最も大きな要因となっています。ご存知のように肺がんとタバコの関係は明らかですが、喫煙女性は喫煙男性に比べタバコ由来の発がん物質の影響を受けやすく、男性喫煙者の2倍も肺がんになりやすいと報告されているにもかかわらず喫煙女性が増加しています。さらにタバコを吸わない女性肺がんも増加しています。そのうちの一因である受動喫煙ですが、発がん物質の多くは、タバコを吸った煙(主流煙)よりも、タバコをはいた煙(副流煙)に多く含まれています。タバコや大気汚染と全く関係のない女性肺がんも増加しており、その原因として欧米を中心に遺伝子やホルモンの研究が進んでいて、女性に多く認められるX染色体上に存在するがん増殖に関係する遺伝子と発がんとの関係や、性ホルモン受容体の性差との関係などが明らかになりつつあります。実はこのような女性肺がんこそ陽子線治療がたいへん有効なのです。

ところで女性は男性と比べて、成長に伴う呼吸機能の発達が多く早く止まるばかりでなく、加齢に伴い気道弾性が早く消失することがわかっています。しかも女性は男性と比較して気管支径が細く、気道過敏性が高く、大気汚染に対する気管支の反応もおきやすく、咳の閾値が低いと報告されていますし、月経や妊娠は呼吸器疾患の増悪因子です。このように呼吸器の不利な女性にこそ陽子線治療が向いているのです。

私は外科医なので、切りたがりの外科医の気持ちがわかりますが、いかに神の手で手術したとしても、切らないで治る陽子線治療よりも優しい外科治療はありません。

多くの方が私たちNPO法人女性呼吸器疾患研究機構の活動および、総合南東北病院の陽子線治療に、ご理解、ご支援を賜りますよう、よろしく願い申し上げます。